校長研修だより２６６

ノートはアウトプットのツールにする

２０２６・１１・４　重枝 一郎

昔から勉強は「ノートを書くことが学習だ」というほど，ノートはなくてはならない存在であった。だから，教師はノートの書かせ方を指導した。でも，存在意義について深く考えさせることなく指導していたのかもしれない。ところが ICT を活用するようになり，ノートの存在意義を，今の学習に合った形で考え，生徒に伝えなくてはならない。

昔の教師は，生徒が，ノートを取りやすい板書をするように指導を受けていた。そして生徒もノートを見て，後で復習ができるように指導されていた。教師は黒板に書きながら説明することが多く，生徒はその黒板を写しながら説明を聞いている。その際，教師は区切りごと，生徒が写し終わるまで待つ必要があった。それによって説明のテンポ感は悪くなることもあり，生徒を引き込めるようなスムーズ感がなくなることもあった。生徒の方も，説明を聞いて内容を理解するより，ノートをきれいに書くことの方を優先させていることもあった。ただ，ノートをきれいに書いているからといって，テストの点数が高いかどうかは必ずしも一致しないのは教師もわかっている。

おそらく多くの先生が実践しているとは思うが，このノートの活用について，学習プロセスでの実践を紹介する。

前提として言っておくが，ノートは，授業の記録としての役割は終えている。では，今はどんな役割なのか。それは，**「アウトプットのツールにする」（インサイドアウト思考）**という役割になる。この考えにおいて，ノートは非常に優れていると思う。なぜなら，一般的に頭よりも身体で覚える方がはるかに多くのことを正確に覚えることができるし，紙の方がタブレットより書きやすいし，全体像を見渡しやすい。書いてきたノートを何冊か重ねるとすごく達成感もある。

「ノートをアウトプットのツールにする」というのは，教師の説明，意見交流などを一旦インプットして，頭で整理してからノートに書くということを，ルーティン化してやるということである。そのイメージを伝えるために，数学と社会の授業で具体的に話す。これも「ミッション AL」（①目標を共有②思考③チャレンジ・振り返り）に当てはまっているということを言っておく。

【数学】

① 鉛筆を置かせて，聞くためのレディネスを整える。ここで，授業の流れを生徒と共有することになる。**【マインドセット】**
② 本時のゴール（めあて）の説明をする。ノートに一切書かせない。説明は，ただ説明するだけでなく，効果的に問いかけや発問をしながら説明する。クラスに一体感をつくる。**【インプット】**
③ 説明が終わったら，ここで初めて生徒はノートに書く。**【アウトプットのツール】**
④ 例題に移るが，生徒はノートには一切書かずに，黒板で教師の問いかけに答えながら一緒に例題を解く。**【インプット】**
⑤ ④の例題をなるべく自力でノートに解く。**【アウトプットのツール】**

この流れの後，類題演習をしていくことになる。経験上，生徒は主体性をもって取り組む。しかも解けるようになっていく。

社会では，時間配分もつけてみる。

【社会】
① 鉛筆を置かせて，聞くためのレディネスを整える。見るべき教科書やタブレットは随時指示して開かせるが，一切ノートは書かせない。ノートは閉じたままである。
【マインドセット】
② １０分間，教師が生徒を巻き込みながら説明する。**【インプット】**
③ １０分間，生徒はノートに今習ったことをまとめる。必要があればタブレットなどで調べてもいい。**【アウトプットのツール】**
④ １５分間，グループワークで各自がまとめたことを発表し合う。④があることで②のインプットが強まる。**【実はインプット】**
⑤ ５分間，④で新たに学んだことなどを最終的にもう一度各自ノートにまとめる。付加修正の時間。**【アウトプットのツール】**

ICT が普及すると，当然ノートの役割は変わるはずである。今一度，ノートの使い方を考えることで，授業効果を高めていくことを生徒と共有してほしい。

2030 年度からの次期学習指導要領の議論が今，中教審で進んでいる。デジタル教科書と紙の教科書を選択できる形にする議論や，小学校での「情報の領域」の独立や，芸術や表現の過程において安易に AI に頼るのではなく，手で書く・描くといったアナログの重要性などの方針が示されている。